



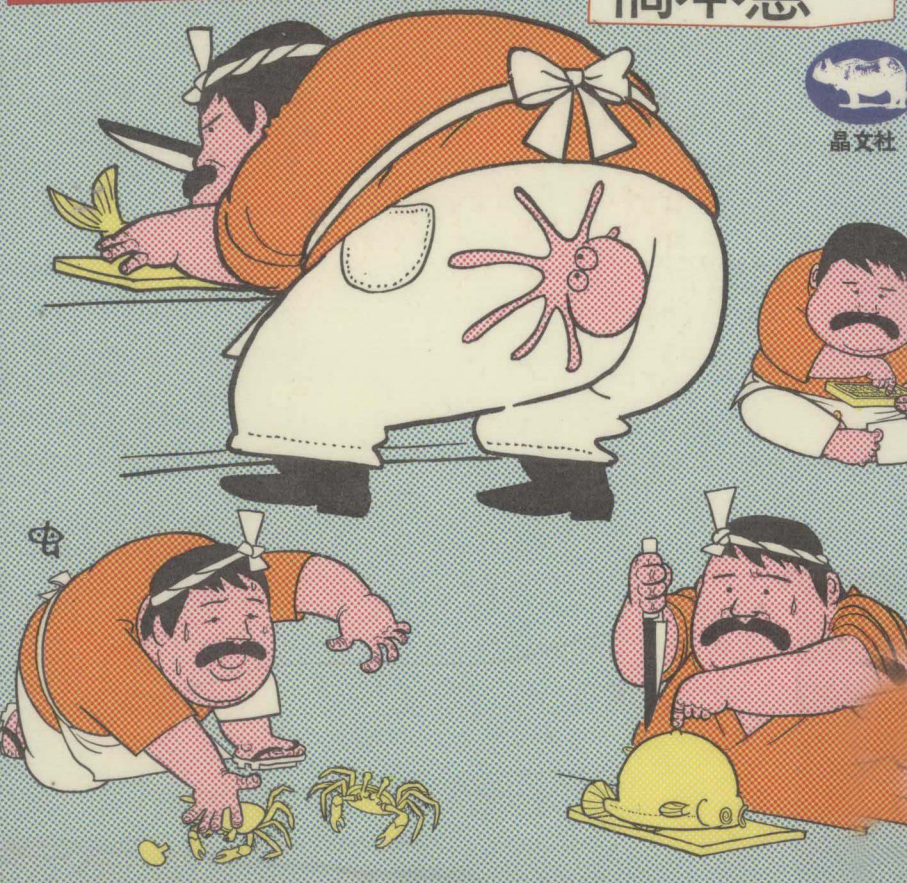
就職しないで生きるには②

包丁一本 がんばったんねん!

橋本憲一

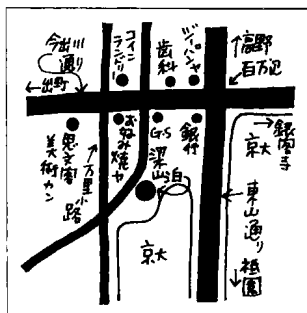


晶文社



橋本憲一（はしもと・けんいち）

一九四八年、京都生まれ。鹿児島大学中退。
小料理屋「梁山泊」主人。
住所：京都市左京区吉田泉殿町五
電話：〇七五（七七二）四四四七



〈就職しないで生きるには〉②

ほうちよういつばん

包丁一本がんばったンねん！

一九八二年五月一〇日初版

一九八三年三月三〇日四刷

著者 橋本憲一

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一二二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六 一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

© 1982 Kenichi Hashimoto

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〔検印廃止〕 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

就職しないで生きるには②

包丁一本 がんばったンねん!

橋本憲一



晶文社

ブ
ッ
ク
デ
ザ
イ
ン

平
野
甲
賀

包丁一本ががんばったンねん！

目次

- 1 そうだ、料理屋をやろう 9
- 2 はじめて包丁をにぎった 24
- 3 店にヨメハンがきた 39
- 4 錦市場では、まず「へぎ板」を買った 54
- 5 お客が来ない 70
- 6 金か、自由か？ 84
- 7 うまいものに国境はない 97

8 フグの免許を取る

120

9 老舗にグッドバイ

142

10 厨房、四つの近代化

158

11 食器も自分で作りたい

168

12 梁山泊の一日

186

あとがき

206

1
そうだ、料理屋をやろう

京都に百万辺という交差点がある。東山通り（あるいは東大路）と、今出川通りが交わるところだ。

東大路は、京都の東側を南北に走る大きな通りである。今出川は市内の北側を東西に走る、おなじように大きな通りである。したがって百万辺は京都市の北東部に位置する、京都ではわりとよく知られた交差点だということになる。

京都大学も百万辺にある。わたしの家は京都大学と塀一つはさんで建っている。町名は

泉殿町である。泉殿などというからは古い町だったのだろう。しかし、そのいわれはよく知らない。百年ほど前に第三高等学校が百万辺より少し南にできた。その数年後、京都大学ができて、今日の町の原型がととのったのだ。

四、五十年前まで、このあたりは寂しい場所だったらしい。戦後、大学が新制になって、学生のかずが増えるとともに、百万辺はようやくぐいといはじめた。

わが家は、建築後、九十年をこえている。いたみが激しく、ボロ家に近い。だが愛着があるので、さほどつらいと思わない。

父は、わたしが小学校一年生の秋に他界した。家が大きかったので、母親は幼い姉とわたしをかかえて旅館をはじめた。

彼女は子供たちに暗い思いをさせまいと、ことあるごとに陽気に暮すことに心をくばった。もともと根が明るい人だった。しかも気丈夫なところもあり、わたしたちがハラハラすることもたびたびだった。

ある日、近所の郵便局の女事務員のぞんざいなあつかいに腹を立てたことがあった。母はニコニコ笑いながら、

「おたく、一つ笑うてみやはたらかないです。そんなこわい顔をしてはったら、男はんがよりつかはらしまへんどすえ。お笑いやす」

と、やわらかい言葉のかげに、力強く命令する態度で迫った。そのときの女事務員のひきつった顔を、いまでもよく覚えていいる。

万事がこの調子だったので、わたしは楽しく育つことができた。

母は飛行機にのるのが夢だった。

大学は鹿児島大学にした。塀一つむこうの京都大学にはいかなかった。鹿児島だと飛行機で帰省できるからだ。そして、京都大学の合格通知が届かなかったからだ。

その鹿児島大学も途中でやめてしまった。そして、上京した。東京では、工事現場のブレハブの飯場を建てたり解体したりするアルバイトをしながら、芝居をやっていた。

そこへ姉から電話がかかった。

「お母ちゃん、なんか変なんえ。どうしたらええやろうか。ちょっと帰ってきてくれへんか」

とりあえず京都に帰ってみた。なるほど、なにか変である。うつろで、にぶく、あの力強さが母親から消えうせていた。老人性痴呆症という診断だった。

まさか母が病気になるとは思ってもみなかった。しかたがない。なんともできないが、なんとかしなくてはならない。どんなにたよりなくても、男はわたし一人しかいないのだ。二十四歳の秋だった。

わたしにだって悩みも迷いも人並にある。しかし、その時間は人とくらべると極端に短かい。あわてものであるからかもしれない。

「よっしゃ。しょがないやんけ。ワシがおかあちゃんのそばにいたるやんけ」

あっさり芝居をやめて、京都にもどることにした。久しぶりの百万辺だった。

さて、帰ってきた以上、食わねばならない。母親も医者にかけなければならぬ。要するに金をかせがねばならないのだ。それなのに金をかせぐことは一番の苦手だった。

勤めにすることも考えた。だが、きゆうくつな感じは好きではなかった。生意気で世間知らずだった。世の中を甘くみていた。いまでもそうだけれど。

わたしには紋切り型の勤め人しか頭になかったから、勤め人になることはやめにした。すると、あとは商売ぐらいしか思いあたらない。独立自営ということにひかれるところもあった。家業も商売屋だったので、抵抗感はなかった。金のかせぎ方がすなわち生き方であるということも、おぼろげながらわかっていた。しかし人生を見通すには、わたしはあまりにもアホだった。

「商売、おお、けっこうやがな。だんない、だんない。ワシにまかしてんか、なに屋はんでもやりますがな。屁のカッパや。なんでもやったるわいな」

単純。調子乗り。今から思うとアホの見本であった。もっともその後、かしこくなったとはいいづらい。

豊かな気分で商売ができるといいぐらいに思い、まず商品が山積みされるスーパーマーケットを考えた。ものがたくさんあると豊かな気分にはたることができると。それが気に入ったのだ。

さっそく、東大阪にある食料品中心のスーパーマーケットの本社に出かけた。そこは、スーパーマーケットの元締めであった。チェーン店をふやし、大量仕入れで仕入価格を安くして、安く売る商法の会社だった。チェーン店の一つとしてやってもいいと考えていた。そこで、百万辺での経営の可能性を調べてくれるようにたのんだ。背広をきた二人のオッサンが、若僧の思いつきにわざわざ百万辺まで調べにきてくれた。

調査の結果は「ダメデアル。ヤメタ方ガヨイ」であった。

あたりは京都大学の敷地ばかりで、住人の数が少なすぎる。自分の好みだけで業種を選ぶわけにはいかないこと、環境とのかねあいをうまくみつめて業種を考えねばならないことをおしえられた。

手持ちの条件を生かしきれぬ商売をさがさなくてはならない。そこで他よりすぐれた条件を数えてみる。

家が大きい。

旅館の営業経験がある。

したがって、旅館に必要な備品がそろっている。

あとは、わたしの若さがあった。

どうやら旅館系統の商売をはじめるのがいちばんいいようだ。それなら勝算がある。しかし旅館は四六時中の労働なのでたまらない。子供の頃から、旅館商売のつらさを知っていたのだ。

旅館をやっている、よかったことはなにがあっただろうか、思いかえしてみた。

うまいものを食べさせてもらったことぐらいだ。客にうまいものをだしていたので、自分もそのおこぼれにあずかれたのだった。

「そうや、料理屋や。料理屋にしたらええやんか。うまいもん食べられるし、営業時間も区切れるし。つらいいうたら、夜のテレビが見られへんことぐらいや。これはつらいけど、一つぐらいしんぼうせんとあかん。やっぱり料理屋やろう。き・め・た」

商売は料理屋にした。大学での専門も食品化学だった。まんざら関係ないこともない。それに大学時代には陶芸もやっていた。料理と陶器とは切っても切れない関係にある。そうだ、この家で陶器づくりも再開できる。それで少なからず、芝居をやめたショックがカ

バーできるというものだ。

夢はひろがる一方だった。

「客は主に女性で、うまくいけば、月に三十万ぐらいの金は残る。食器もある。いうことなし。酒・女性・金。ほんまかいな。天国みたいな商売やわ。ワシががんばるで。がんばったんねん」

玄関とその隣につづく応接間を店舗にすることにした。思い立ったが吉日。改装のだんどりを頭の中でめぐらしながら、母と姉に料理屋をやりたいという話をする。

母はよろこんだ。姉はわたしがいいだしたら引かないのを知っているので、ただうなずいていた。

さらにプランをねった。

まず改装は自分でやる。プレハブ建築の経験を生かすことができる。しかし改装に手間どつてはいけない。それはただでさえ少ない資金が、食費に消え去ることではない。心には余裕があったが、財布はそういうわけにはいかない。助っ人を探さないと、能率が悪い。それにプレハブ建築と古い家を手直しするのでは、かなりのちがいがあつた。わからないことが多いので、その辺のことに詳しい人を助っ人を選ぶことにした。昔から出入り